

---

# ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

ジンダイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

### 【Zコード】

Z9388Y

### 【作者名】

ジンダイ

### 【あらすじ】

舞台はカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イッシュの五つの地方からなる世界。

そのひとつ、ホウエン地方の隅にある、ちょっと変わった風習のある小さな村。そこでも他の町と変わらず、今年も新人トレーナーが旅立とうとしていた。しかし、この村特有の最初のポケモンを決める儀式から、少年達は少しづつ、伝説のポケモンの戦いに巻き込まれてゆく。

この話は、人々から忘れられた戦いとそれを止めようとする人と

ポケモンの物語である。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

## プロローグ

ここは上も下もない、時間も空間も安定しないこの世の裏側、反転世界。

そこにはいる2匹のポケモン。

体は白と紫で、首の後ろに管のようなものがあり、長い尾をもつてんしポケモンのミコウツーと、赤いトゲのついた黒い影のような翼をもち、ムカデのような姿をしているはんこつポケモンのギラティナだ。

ギラティナ「そろそろ…始まつてしまつのか…」

ギラティナがため息を吐きながら囁く。

ミコウツー「戦いは、復讐は何もうみださない…憎しみ以外は…それは私が一番よく知っている」

ギラティナ「そうだな…だが皆はそれに気づいていない…ダークライが上手くやつてくれればいいが…」

と、そこへ2匹の後ろに黒い影が地面を這つてきた。

？？？「帰つたぞ」

そして黒い影からポケモンが出てきた。青く鋭い目に、黒い衣のような体をしたポケモン、あんこくポケモンのダークライ。

ミコウツー「…どうだったか」

ダークライ「ショイミは戦いには反対だが、勝てる訳がないから隠れないと…クレセリアは勝てそうな方に味方すると言つていた

…これからラティオス、ラティアスの所に行くつもりだ

ギラティナ「すまんな…皆の説得を任せて…」

ダークライ「大丈夫だ、問題ない。オレの力なら素早く移動出来るしな。じゃあ、行つてくる」

そしてダークライは影の中に沈み、消えた。

ミコウツー「私もカントーの奴等を説得したほうが…」

ギラティナ「やめておけ、三鳥はルギアを尊敬している…彼奴等はルギア次第だ。それにオレはディアルガ達には会つ」とすらできそうにない…アルセウスの裏切り者だしな」

ミコウツー「…そうだな」

ミコウツーはそう言つて、そこらじゅうに浮いているシャボン玉の様なものを見渡す。

ミコウツー「私は前回の戦いには参加していなかつた…もう戦いはまづんざりだつたからな」

ミコウツーは遠くの方に浮いているシャボンを見る。その中には、無人島が写っていた。今だにかたずけられないガレキがちらばつている。

ミコウツー「しかしもう私がしたような悲劇は繰り返したくない…だからこの戦いを止める」

ギラティナ「オレも同じだ。前の戦いでオレのした事の償いとして、皆の暴挙を止める」

ミコウツー「そのためにも、今はダークライを信じよ!」  
ギラティナ「ああ、それしかない。十分な数が戦いに反対してくれれば…皆もやめてくれるかもしれないからな…」

そして同じ頃、ある村で運命がついに決しました…

## プロローグ（後書き）

ふ~やつと終わつた~途中で意味分かんなくなつて3回ほどわざわざ  
ちやつたよ、本文。  
さて、今日から書かせていただく、ジンダイです。感想を書いて  
もらえれば嬉しいです。どうかよろしくお願ひします。

6月3日 ポケモンが貰える日（前書き）

第1話 よう／＼＼＼＼＼＼＼＼やく始動――な 長かつた  
軽く3、4回ほびきえたよ 本文

ナオヤ「惨めだな、作者」

あ、脇役のナオヤ君

ガオヤー 準主人公と言つてほしいね」

一  
緒  
じ  
や  
ん

ナオヤ一ハアリ、脇役と準主人公の違いも分かんないような馬鹿な作者だと、俺達が苦労するぜ

（カチン） それ、本気なのかな？ナオヤ君？

カホヤ一本気に決まつてゐるじやないか」

ラ・ン (ニヤリ) じゃ、本編スタート――――――

ナオヤー何書いてんだ? 作者は? 「

## 6月3日 ポケモンが貰える日

ホウエン地方、キナギタウンとカイナシティの間にある小さな島。朝、この島のひとつの中間で少年が眠っていた。

少年「ZZZ…」

お母さん「コウタ～朝よ～起きなさい～」

少年の母親がリビングから呼び掛けている。

「コウタ「ん…ん～もう朝か…眠む」

少年…「コウタは眠そうに目をこする。

お母さん「今日は6月の3日でしょ～いいの～」

「コウタ「なぬ…そうだったのか…? 僕としたことが…今いくぞ…!」

「コウタは跳ね起き、素早く着替えて走る。

この村では、10歳以上の人には今日…6月3日に最初のポケモンをもらい、旅立つことができるのだ。

「コウタ「リビングに到着…!」

リビングには、すでにパンと牛乳、味噌汁の朝食が用意されていた。

お母さん「早いわね～いつもとは大ちが…」

「コウタ「いただきます」」お母さんはまごつてきますダッガチャドガ

ツバタツ」

「ウタの朝食は一瞬で綺麗に食べ尽くされ、肝心のウタは玄関で誰かと激突し、伸びていた。

お母さん「ウタへ氣をつけて行つてらっしゃーい」

お母さんは玄関であつた事に気づいてないようだ。

「ウタ「痛つて…おーーーナオヤ…危ねえだろがーーー氣つけるよーーー」

ナオヤ「んなこと言われてもな、お前が急に飛び出してきたからだろがーーー」

この少年はナオヤ。ウタの幼馴染みであり、親友だ。

？？？「全く…一人とも慌てすぎよ」

ナオヤ「メイみたいな乱暴凶悪女には言われたくノグボホツ」

ナオヤは後ろにいた少女に殴られ、うずくまつた。

メイ「だーれが乱暴凶悪女つて？」

この少女の名前はメイ。一人の唯一の女友達だ。といつより、この村では10歳前後の少女は1人しかいない。

メイ「それで、どうでもいいけど一人とも服が乱れ過ぎよ。儀式にはちやんと正装でいかなきや」

そう言って、メイは綺麗に着こなした服をみせびらかす。

ナオヤ「ちつ、年下の癖に」

メイ「なんか言った? (怒)」

ナオヤ「いえ何も (汗)」

ナオヤは昨年の6月後半、メイは一ヶ月前に10歳になつたので、  
「ウタとナオヤの方が年上なのだ。

「ウタ (メイつて将来、ずっと黙つてたら絶対モテるよな……)

メイの事を密かに可愛いと思つてゐる「ウタは、ナオヤがボロボ  
ロにそれでいるのを見ながらおもつた。

メイ「じゃつ、あそこのはろひ雑巾はほつといて祠に急ぎまじょ  
か」

もはや、ぼろ雑巾扱いされているナオヤ。

ナオヤ「……グ…ガハ…」

もはや立てないほどまでボロボロになつてゐるナオヤだが、どう  
せいつもの事なので「ウタはほつておいた。

メイ「ねえ、「ウタ? 最初のポケモン誰にするの? 私はリリーラ  
とホエルゴがいいな」

ナオヤ「俺はアノップスとジーランスがいい」

「ウタ (いつもながら復活早)

メイ「黙れ、社会のテスト\* 点が。 (点数はある人物の要請によ  
り削除)」

ナオヤ「ガハッ…ひ、人の古傷をつづくのはやめようか…その手

ストは頑張つて追試でとりかえしたし…」

しかし、ナオヤが弁解（言い訳）をしている間に一人は先に行つてしまつた。

ナオヤ「おい！まつてく「グボハツ」

二人は、ナオヤが何も無いところで転んだ事に気づくはずもなかつた。

6月3日 ポケモンが貰える日（後書き）

ナオヤ「オイ！ 作者！ ！」

ん~、何~

ナオヤ「何だよーあの俺のあつ~」

ネタキャラ

ナオヤ「返答早すぎだろ！ ！ ？」

じゃあ、また今度。 ダツ！ ！

ナオヤ「あつ、逃げられた~」

## わあ、これ祠へーー（前書き）

ただ今、隣で伝書鳩リネロサーチスティが、ぼやきながらGENT-Sの続きを書いております。

「ウヤ「悲愴さんって名前のとおり悲しい人だね…」

作者に似たんでしょう、悲愴もナオヤもモデル同じだし。

「ウタ「え！？ そりなのーーー？」

うん。あの社会のテストも実話だし。でも次のテストでなんと7点上がったという奇跡を起こした人でもある。

ナオヤ「要するに、俺はすげーんだな」

いや、71点上がったということは、その前は29点以下だったということだよ。（しかも上がつても普通レベルだったし）

ナオヤ、悲愴、伝書鳩リネロサーチスティ「うるせえーーー！」

ということで一行だけ、コラボしました。では、本編スタート！

わあ、これ祠へーー！

3人は最初のポケモンを貰うため、祠に急いでいた。

メイ「そういえば、コウタはポケモン誰にするの？」

「コウタ「うーん、気のあうポケモンなら誰でもいいかな…」

「コウヤ「曖昧だな。スクールのアンケートで「最初のポケモンは何がいいですか」っていうのがあったが、何て書いたんだ？」

「コウタ「気のあいそうなポケモンって書いた」

メイ「コウタつたら…」

一応、この村にもトレーナーズスクールがある。生徒は全部で10人ほどしか居ないが。

「コウタ「あつ、見えてきた」

「コウタが指差した所は海岸線で、そこには一人の男が立っていた。

ナオヤ「あ、兄貴！？？」

メイ「コウヤさん！？」

「コウタ「コウヤさんが祠まで連れて行つてくれるんですか？」

この男はコウヤ。ナオヤの兄である。けつこうキャラくて軽い性格だ

「コウヤ「おうよーーいけーージーランスーーー！」

コウヤのモンスター・ボールから赤い光が飛び出し、中からポケモンが出てきた。

ジーランス「じら～」

ユウヤ「さ、みんなこれに掘まつてくれ」

祠は海底の方にあるためポケモンの技、ダイビングを使っていくのだ。

そして4人はジーランスに掘まつた。

ユウヤ「行くぜ！ジーランス、ダイビング！～！」  
ジーランス「じら～！」

ジーランスの周りに空気の膜ができ、3人を包みこんだ。

バシャン

4人はジーランスと共に、海底へとむかつた。

ナオヤ「ガボボボボボボボボボボボボボボボ～！～！～！」

「ユウヤ（あれ？ そういえばジーランスって4人も連れてダイビングできたっけ…）

祠の入り口

ナオヤ「げほつ、げほつ、げほげほげほげほつ  
ユウヤ「悪いい、ジーランスは3人乗りだつたわ」

むせているナオヤに、ユウヤは全く全然ちつとも反省していない  
様子で謝る。

メイ「さつ、行くわよ」  
「ウタ「うん」  
ナオヤ「俺についてはノー・コメントですか?」

そして4人は祠の奥に向かつてあるきだした。

わあ、これ祠へーー！（後書き）

短くてすみません。時間ないんで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9388y/>

---

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

2011年11月29日17時54分発行